

次の文は「田能村竹田展」見学の折、芸術会館の依頼により特別寄稿され、「大分芸術会館だより」第十四号に掲載された文を、そのまま転載したものです。(塩月)

私は竹田が好きになった

福岡教育大学名誉教授
佐伯史談会副会長

清 田 義 雄

わたしは絵は門外漢で何もわからない。それでも今、竹田が大変好きになった。たまらなく好きになった。竹田の絵がわかったなどは云えないが。

元来日本画はあまり好きな方ではなかった。日本画観賞のすぐれた鑑賞設備である床の間の機能の変化で、特に文人画などむつかしくてわからないものだときめてかかっていた。竹田展が開かれるに当って、芸術会館の熱意がわたしを引きずり廻したという事かも知れないが、兎に角すばらしい展覧会を見せてもらった。こんなむずかしいものをこれ程わかり易くときほぐし、たまらなく好きにさせるでだては、主催者自身がその気でなければ到底人をひきつけられるものではない。

年数をかけ、足でかせいだ収集、その苦勞が目に見えるような展覧会である。こうした努力による集積なればこそ、並べ方の工夫が参観者に竹田を身近かなものにさせてくれるのであろう。

勿論背後に専門の学者陣が、真贋判定の分野だけでなく、講演、解説、報道などに行き届いた紹介がなされている。

更にビデオ、展覧会解説書としての「竹田」の編集はありがたい。これ程に準備された展覧会があるだろうか。特に団体見学への親切さには頭が下がる。いつまでもいつまでも時のたつのを忘れさせて見せて貰った。初日は独りで六時間、次には団体引率で二時間以上も過させて

貰った。事情がゆるせば又行つて見たい。

何か飢えているものに水を与えられた感じである。食わずぎらいであった竹田が身近かになつて心を洗つてくれるすがすがしい感じである。

燃えさかるような創造意欲が、退隱、京都行、長崎滞在など、転機をつかんで夫々の機会毎に異様なまでの進展に、突きすすむ感慨が感じとられる。

常人の歩み得ない天才の才能の故にこそ、激しい闘志の成長が内面化されては、表現が深化されていく。こうした画面にひきつけられながら、体中が揺り動かされるような氣持になつて去り難い。

賛が読めたらもっと楽しかろう。詩の心の素養があったら更に深い共感がわいてくるであろう。何等画心をもたない私まで没入させてくれる竹田とは一体どんな方であったのか。「自画像」に見る竹田の姿は好きである。この顔つきと姿態の中に私の好きなタイプがにじみ出ているからである。左掌に後補があると云われるが、特にこうした実際の動作としてはとりがたい掌の扱いに意図的にか、ゆったりとしたくつろぎの姿勢でありながら、爪先までも神経のとがった凝視の心が感ぜられるようだ。

ある。

医療をすて、学問研究によつて身を立て、敢えて治政批判の建言書を出し、(出さなかつたとも言われるが)退いて画業に入る。天才ならばこそなし得る決断と、画業への執心。

わたしは竹田が好きになった。竹田の作品のわかるものから一つずつ好きになつていきたい。

延岡の史跡を訪ねて

古藤田 太

- 外つ国の神祈りたる宗りんの陣所の跡は深きかやほら菅原
- 年古りて藤江の墓はひそと建つはるかに聞こゆ岩熊うま壠音
- いにしえの松尾の城をたずねゆく雨の冬草踏み鳴らしつゝ
- 天正の昔偲ばん土持の松尾城址に我立ちぬれし